

奈良に古くから伝わるむかしばなしを紹介します。

身代わり地蔵

文・山崎しげ子



木造地蔵菩薩立像

今年6月、県教育委員会の調査により平安時代中期の制作と判明、貴重な古像として注目されている。高さ約88cmで、左手に宝珠、右手に蓮茎を持つ(後世の補修)。唇に今も朱が残るが、かつては全身に美しく彩色が施されていた。寺伝では、満米上人の作という。満米は平安時代に大和郡山市の矢田寺を中興した満慶和尚のこととされる。

むかしばなしの矢傷のあとは見られず。すでに治癒したか?



常楽寺の本堂

建立年は不詳。明治初年に廃寺となったが、明治12年に再興。年に2回、地蔵まつりが行われる。

奈良盆地の南部、高市郡高取町。その南東にそびえる高取山(標高五八四m)の山頂に、かつて、難攻不落の山城、高取城があった。南北朝時代以来、豪族の越智氏、豊臣秀長の重臣、本多氏、譜代大名の植村氏らの居城として威容を誇ったが、今は、壮大な石垣のみが残る。秋は紅葉がとくに美しい。

* 昔、矢田村(今の高取町谷田)の池の谷に、細長い小さな田が十枚ほどあった。この田は村の常楽寺の所有で、とれた年貢米はお寺のおつぼん(仏様に供える米や坊さんの飯米)として納められた。

この田の作人は二人いて、上と下、半分ずつに分かれていた。だが、この



たかとり城まつり

(11月23日)

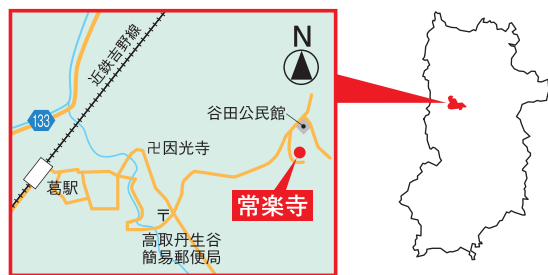
高取城跡(国指定史跡)につながる土佐街道一帯を会場に、時代行列や火縄銃の実演等が行われ、フリーマーケットも出る。今年は第25回を記念して「かごかき競争」が復活。一段と華やかになりそうだ。

あたりは水利が悪く、上の田には十分な水があったが、下半分はいつも水が不足していた。

しかし、下の作人はお地蔵さんを信じる正直な人で、とれたお米が少ないうち、上の作人より多くのおつぼんを寺に納めていた。

ある年、大変な旱が続く、上の田でも水がなく、とても収穫できそうになかった。ところが、不思議なことに、朝になると、上の田には水がないのに、下の田には水が一面に満ちていた。上の作人は、きつと下の作人が夜中に水を取りに来ているのだと思っただ。また取りに来るに違いないと思っただ。ある晩、上の作人は弓矢を持って山で待ちかまえていた。すると、人影が上の田に来るように見えたので、

物語の場所を訪れよう



「常楽寺」(高取町谷田)へは… ※拝観は下記へ要連絡
近鉄吉野線葛駅下車、線路を渡り、東へ約1km。因光寺を過ぎ、高取丹生谷簡易郵便局の交差点を北東へ。谷田公民館手前を山手に入る細い道を徒歩で、約100m登る。谷田公民館横に駐車場あり(5台程度)。

☎高取町まちづくり課 ☎0744-52-3334(内線322)

狙いを定めて矢を放った。確かな手ごたえがあり、作人はそのまま家へ帰っていった。

翌朝、田を見に行くと、下の作人は元気に働いているではないか。不思議に思い、昨夜のことを話して詫び、下の作人と寺へお参りに行った。すると、お地蔵さんが横に倒れていて、なんと、肩に矢が二つに折れて突き刺さっていたのだ。それから、そのお地蔵さんは「身代わり地蔵」と呼ばれるようになったそう。

* 常楽寺は、杉、檜の林の中にひっそりと建つ。ささやかな境内に本堂と庫裏。身代わり地蔵さんは、今も、谷田の村人たちの手でしっかりと守られている。